

[R3.七小校内研究に向けて]

「自ら考え、みんなで学ぶ子供の育成」

～付けた力をもとに、分かる、できる、楽しいを実感し、

共に学び高めあえる、国語・算数の授業づくり～

[振り返ってみよう
研究の足跡]

[見晴るかそう
新年度の研究]

令和2年度校内研究のまとめからの、3年度研究

校内研究部

1. 研究テーマ・サブテーマについて

研究テーマ「自ら考え、みんなで学ぶ子供の育成」

サブテーマ～付けた力をもとに、分かる、できる、楽しいを実感し、

共に学び高めあえる、国語・算数の授業づくり～

昨年度もまた講師の先生方を招聘し、仮説をもった研究授業を中心に据えて、上記の研究テーマ・サブテーマに基づく授業研究をすすめてきた。

国語については、3年間積み重ねてきた教材研究を引き継ぐとともに、教科書が新しくなったことを踏まえて、新教材の教材研究に挑戦するという共通認識のもと研究を進めてきた。算数については、4年前の市教委指定の研究発表の成果と課題を引き継ぐ授業研究の延長として教材研究を継続してきた。

全学年による国語の研究授業や選抜学年による算数の研究授業は、学びたくなる教室を学習環境として作り出し(主体的学び)、共に学び合う学習場面を授業の中に作り出し(対話的学び)、教材の特質に迫る発問の工夫により深く考える学習を創り出した(深い学び)。しかしながら、研究協議会・事前の授業研究における私たち自身の学びや、CDT 学力調査結果の分析結果は、本研究の継続を示している。

よって、新年度も上記のテーマ・サブテーマに基づく研究を継続していくものとする。

2. 研究方法・研究内容について

(1) 研究方法

① 概要

国語の教材へのアプローチは、上西先生が代表を務める文芸教育研究協議会(以下、文芸研と表示)の教材論・授業論による事前の教材解釈からである。

校長室で上西先生と向き合い、研究部も加わり授業者自らが教材の特質を学び、教材とする作品の一文一文を読み進めていく。私たちの校内研究には、授業力(構想力や運営力)の向上や子供の変容で明らかなように、実感を伴う成果がいくつもあったが、中でもこの上西先生とひざを交えた時間は密度の高い大きな学びの場だった。教科国語のしかも文芸教育研究に特化した実践研究を長年続けてきた民間教育研究団体の研究の成果を、上西先生の肉声を通して直に学ばせていただき、教材となる物語文や説明文の作品世界を改めて捉えなおすこの時間は、目から鱗が落ちることの連続だった。文芸研の教材の読みでは、著者の人間性・生き方や作品誕生の歴史的背景・社会的背景を包括解釈し、そこから教材の特質規定をしている。この教材の特質への迫り方に仮説を持って、授業者が指導計画を練る。この部分が、授業者が一番苦しく、模擬授業の段ではみんなで一緒に苦しみ、悩み、考え、大まかに共通理解出来た上で本時に臨んできた。

算数では、今年度、夏季休業後半に福田先生を招いた事前の教材研究を設定し、授業者とともに教材の提示の仕方や場面の設定の仕方等いろいろなアイデアを考えることができた。

その上で、授業者が指導計画を練った。国語と同じで、指導案の「本時」の計画については、事前に「模擬授業」を実施し、授業者の研究仮説や提案を受けて、課題設定や発問の工夫、授業の流れやしかけについて、実際の学習場面にいる児童役や、指導場面にいる授業者役になりきって、参加者全員が授業づくりに関わるようにした。この模擬授業もまた大きな学びの場となった。仮説を持って授業に臨むのが、授業者一人ではなくなったからだ。全員で想像した本時の授業展開で、全員が一コマの授業を創造する。研究授業の醍醐味がここにあった。

最後に、講師の先生を交えた全員で、提供された授業を「研究協議会」として振り返った。

① 授業研究を中心にしたテーマ・サブテーマへのアプローチ

年間講師である上西先生の講演による「教材研究入門」の指導を事前の準備学習として設定した。今年度から新しい教科書になり、新教材が増えたことと、教師が深い教材研究をすることこそが、児童の深い学びにつながると考えたからである。このように準備しながら今年度の研究を進めてきた。研究全体を振り返ると、分かる・できる・楽しいを実感する授業づくりや、学び合い・高め合う授業づくりがまた一歩前進した。「自ら考え、みんなで学ぶ七小の子供」もまた一回り大きく育ってきた。

「教材研究による作品の特質を知ること」の学びからスタートした今年度の研究である。コロナ禍での臨時休校を経験したからこそ、学び合うことの楽しさを実感した都市となった。新年度の研究も授業研究を中心として、引き続きテーマ・サブテーマへのアプローチを目指していきたい。

② 魅力的な教材・引き込まれる課題・精選された発問の工夫により主体的に学ぶ児童の育成

教材に関しては、国語の上西先生からも算数の福田先生からも教材研究そのものの大切さを教えていただいた。授業者である私たち自身が楽しい教材、大好きな教材、興味のもてる教材でなければ、子供たちにとって楽しく、大好きで、ワクワクして意欲あふれる授業にはならない。私たち七小の研究では、この視点を大切にしてきた。学年単位の教材研究が個人研究になってしまう七小では、模擬授業の位置づけが重要だった。授業者は原案となる指導案は作成するが、最終指導案は模擬授業をすすめる中で参加者全員の知恵を出し合い、その共通理解によって決定してきた。授業の構造についても内容についても、一人一人の考え方や発想が活かされたものになり、授業者は模擬授業の代表者として授業を展開していった。この方法は七小校内研究の大きな特長であり、新年度の研究においても引き続き大切にしていきたい。

③ 言語活動・算数（数学）的活動により、多面的に思考する子供の育成

思考活動は、学習内容に興味・関心をもたせ、何のために、何を、どのように考えたらよいかのかが分かれば、また授業に効果的な仕掛けがあれば、深めていくことができる。その効果的な仕掛けとなる言語活動・数学的活動の開発がとても重要である。上西先生からは、物語文や説明文を読み取るツールとして、作品の特質に迫る言語活動について助言していただいた。福田先生からも、数学的思考を促す教材・教具や児童についての必然性を大切にしたい課題の設定の仕方について学ばせていただいた。私たちにとっては、まだまだ学ぶべきことの多い視点である。新年度への更なる継続とともに、講師のお二人にも引き続きご指導いただきたくことを希望したい。

④ 顔を突き合わせて学び合う子供集団の育成

教科指導のみに留まらぬ視点である。少人数集団だからこそ成立している学び合い、目が行き届く故の協働、ということでこの視点を楽しめないようにしたい。少人数だからこそつけたい力とはなにか、少人数だからこそ学ばせたい集団的な学びとはなにか、の問いを大切にしたい。学び合う集団は、ドラマチックな行事づくりや思いやりあふれる生活づくりの延長線にあること、顔を突き合わせた学び合いは学習活動のどこの場面に仕掛けるか、そしてそれはどんな課題を以て仕掛けるのか、常にこの問いを持ちながら授業づくりをすすめていきたい。

⑤ 全学年による国語の授業研究、数回の算数の授業研究

計画通りに実施できた。国語の全学年による授業研究は継続しながら、算数の授業研究についても2学年で実施してきた。2本立ての研究授業では、午前中の授業については研究協議を深めることはできないが、事前検討会となる模擬授業は、共同研究・集団研究が可能である。また、それだけの効果もあった。新年度も、今年度程度の研究授業を実施していきたい。

⑥ 全学年の研究授業実施による七小らしい授業づくり

研究授業を実施し、事前の模擬授業と事後の研究協議会と合わせた授業研究を校内研究の中心としてきた。研究テーマ・サブテーマに迫る視点を定めて、実践的に、しかも教科教育における教授法理論と授業実践力の両方を兼ね備えた講師を招聘して、授業研究をすすめてきた。引き続き新年度の校内研究も、まずは私たち自身と目の前の子供たちの実態を出発点にし、七小らしい楽しくやりがいのある研究にしていきたい。

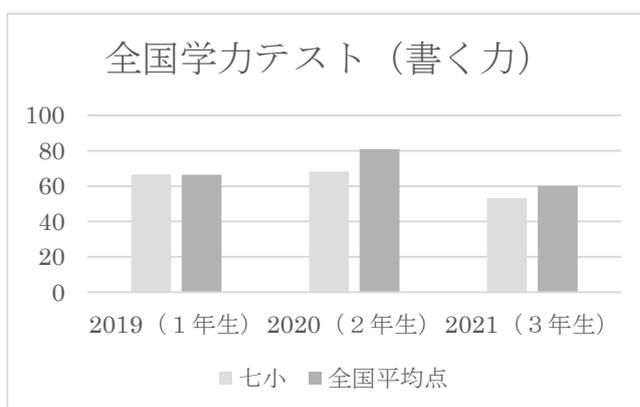
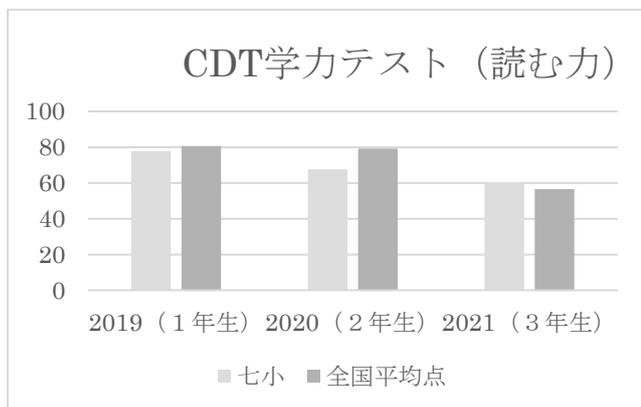
[参考資料]

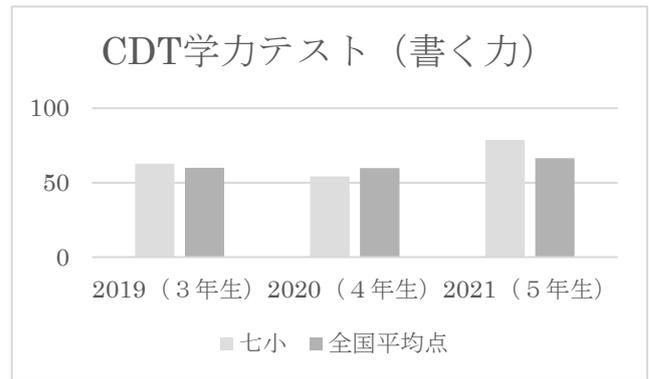
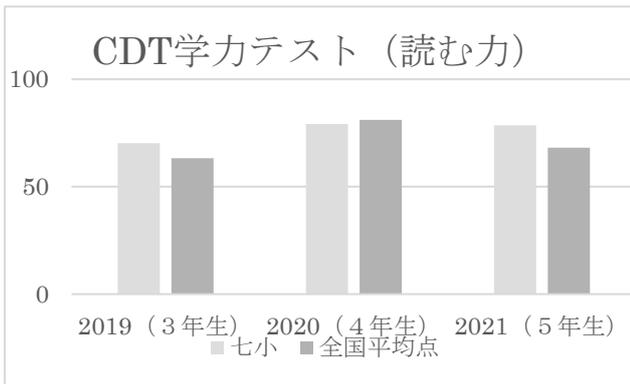
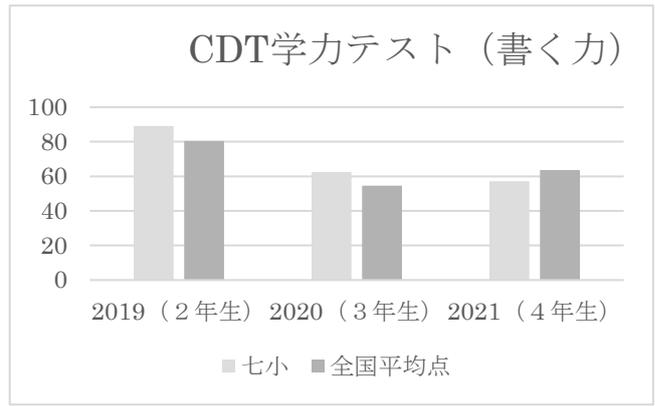
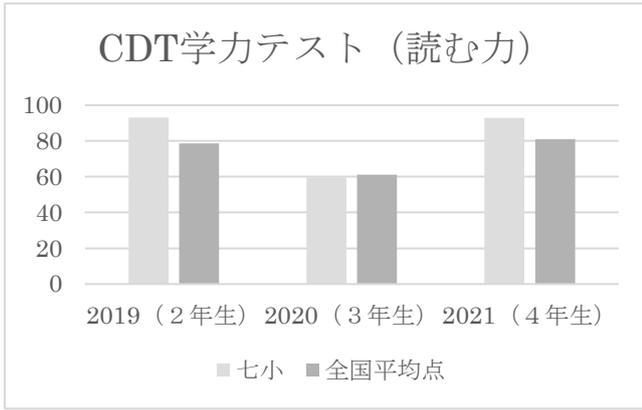
CDT 学力調査結果分析について

1. 経年変化(3年間)の視点から

集団を固定して調査結果を数値で単純比較することにより、七小の児童が全国平均と学力の相対的位置が分かることになる。そして、七小の学級の構成人数が減少したことに伴い、それぞれの学級の課題も見ることができる。今年度の研究授業の教材を考える上でも、参考にしたい。

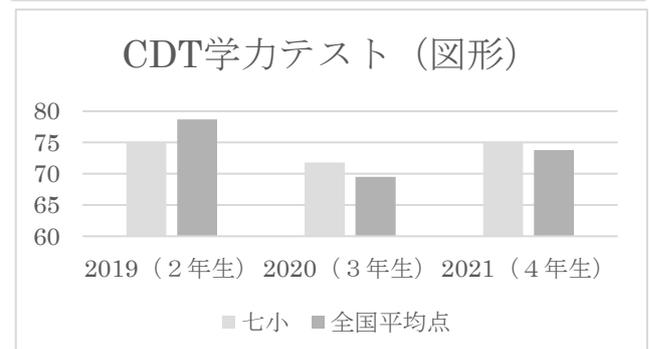
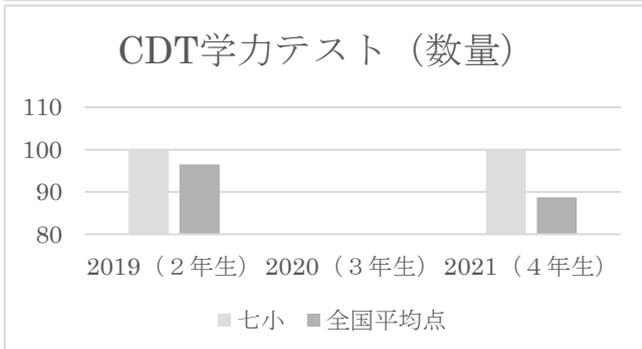
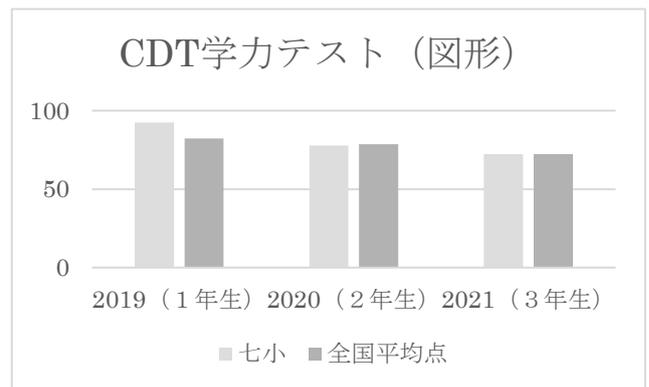
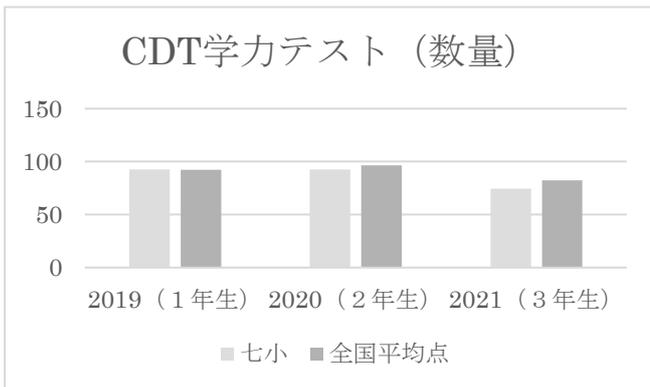
<国語について>

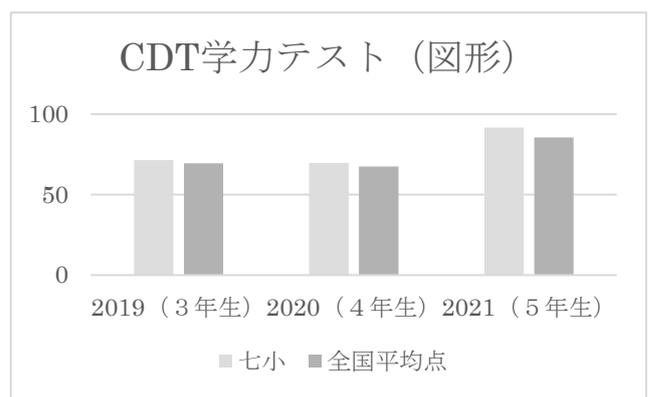
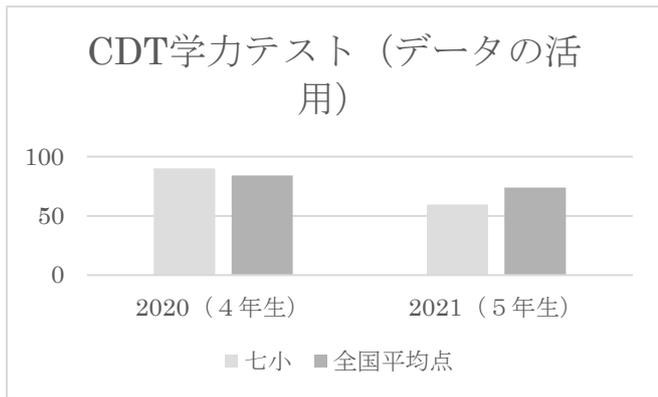




上のグラフから、4年間にわたる研究の成果として、どの学年も「読む力」は着実に上がっていることが分かる。しかし、書く力については厳しいと考えられる。講師の上西先生から、「今後は物語文+説明文+詩+短歌・俳句+作文も考えてみてはどうか。」とのアドバイスをいただいたので、**作文を研究に取り入れてみたい。**

<算数について>





日々の積み重ねにより、基礎学力はついている。しかし、発展的な問題において無回答が見られた。特にデータの活用の問題においては、極端に弱い面が見られた。考え方を記述するという点で、国語での学びが活かせるようにしていきたい。

今年度は、算数の研究では高学年の図形学習につながるように低学年・中学年での「高学年につながる感覚づくり」の学習を設定したい。そして、図形概念を養える機会が、算数の時間以外でも行えるようにカリキュラムを確立させたい。また、夏季休業期間に福田先生をお招きして、高学年の図形の学習の模擬授業を実施していただき、児童の立場での教材との出会いを体験する場を作りたい。